

2017年度 パラグアイ



教師海外研修報告書



独立行政法人 国際協力機構（JICA）四国支部

【後援】 外務省、文部科学省

香川県教育委員会、徳島県教育委員会、高知県教育委員会、愛媛県教育委員会

目 次

教師海外研修とは？

- 教師海外研修の目的／応募条件／派遣期間／募集時期／2017 年度の研修国「パラグアイ」について 1
- 教師海外研修のながれ 2
- 海外研修日程 3
- 参加者氏名 5
- 海外研修レポート 6
- 同行者より 19

JICA 四国支部 教師海外研修とは？

■教師海外研修の目的

JICA は、諸外国との関係や異文化理解の学習について、国際協力を通じて培った経験や人材、ネットワークを活用し、積極的に支援を行っています。この教師海外研修は国際理解教育／開発教育に関心を持つ教員を対象に、実際に開発途上国を訪問することで、開発途上国が置かれている現状や国際協力の現場、開発途上国と日本との関係に対する理解を深め、その経験を次代を担う児童・生徒の教育に役立てていただくことを目的として実施しています。研修参加後は、教育現場で国際理解教育・開発教育を推進する中核となるような人材となってもらうことを期待しています。

■応募条件

四国 4 県の国公立・私立の小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、高等専門学校、特別支援学校教員及び教育委員会の指導主事等で、応募締切り時点で年齢が原則 50 歳以下であり、所属長または教頭の推薦が得られる方（JICA から海外に長期派遣された経験のある方は除きます）

■派遣時期

8 月 2 日（水）～8 月 12 日（土）

※派遣時期は、実施年度により変わります。

■募集時期

毎年 4 月上旬から 5 月中旬

※毎年、四国内全ての学校に応募要項をお送りしています。

■2017 年度の研修国「パラグアイ」について

(1) 正式名称

(和文) パラグアイ共和国

(英文) Republic of Paraguay

(2) 政体 立憲共和制

(3) 人口 約 685 万人 (2016 年 パラグアイ統計局)

(4) 首都 アスンシオン

(5) 面積 40.7 万平方キロメートル (日本の 1.1 倍)

(6) 民族 先住民と欧州系の混血 95%、先住民 2%、欧州系 2%、その他 1%

(7) 言語 スペイン語、グアラニー語 (ともに公用語)

(8) 宗教 主にカトリック

(9) 一人当たり GNI 4,070 ドル (2016 年 世銀)

(10) 主要貿易品目 (輸出: 大豆、牛肉、植物油、小麦、穀類)

(輸入: 機会、原油・燃料、自動車)

【参考】「外務省ホームページ-各国・地域情勢-」外務省





教師海外研修の流れ

参加決定から報告会まで、1年間にわたる研修の流れをご紹介します。

6月

国内事前研修

国内事前研修～海外研修に向けた準備～

国内事前研修では、JICAやODAについての知識に加え、訪問国の現状、開発課題等への理解を深めるとともに、現地研修での「視点」について考えます。また、研修後の授業立案に向けて国際理解教育・開発教育を実践するためのスキルアップを図ります。



8月上旬

海外研修

海外研修～帰国後の授業に向けた素材集め～

JICAプロジェクトサイト・JICAボランティア活動現場・現地の学校の視察や、現地マーケットで教材研究のための素材収集等を行います。



8月下旬

国内事後研修

国内事後研修～授業実践に向けた準備～

海外研修を振り返りながら、それぞれの情報を共有します。今後、授業でどのように伝えていくか、アイデアを出し合いながら参加者全員で授業計画を考えます。



9月
1月

授業実践

授業実践

それぞれの学校で国内・海外研修での学びを活かした授業を実践していただきます。子どもたちが、何を知り、どう行動するようになるよいか、海外での経験と国内での研修の成果をいかに発揮しましょう。

2月

報告会

報告会&国際理解教育セミナーでの報告

「海外研修で何を学び、どう授業に活かしたか」を参加者間で情報共有し、「その授業で子供たちが何を学び、どんな変化が見られたのか」など国内外での研修の成果を報告します。



研修参加後は、所属校で継続的に授業を行い、四国の国際理解教育・開発教育を推進する中核となって活躍していただきます。

海外研修日程

日順	日付	プログラム	滞在先
1	8月2日 (水)	成田空港発 (16:25 発)	(機内泊)
2	8月3日 (木)	成田空港→アトランターサンパウロ→アスンシオン空港着 (12:40) 【JICA パラグアイ事務所訪問】 ・ JICA パラグアイ事業概要説明、ブリーフィング	アスンシオン
3	8月4日 (金)	【シニア海外ボランティア活動現場視察】 ・自動車整備隊員@ドン・カルロス・アントニオ・ロペス職業訓練校 【移動】 アスンシオン シルビオ・ペティロッシ空港→エンカルナシオン空港 【シニア海外ボランティア活動現場視察】 ・野菜栽培隊員@ラ・パス農業協同組合 【日系社会視察】 ・ラ・パス日本人会表敬	フラム市
4	8月5日 (土)	【日系社会視察】 ・ラ・パス日本語学校 ・移住学習見学 【青年海外協力隊/シニア海外ボランティア活動視察】 ・ラ・パス市総合コミュニティ開発事業（保健師隊員、コミュニティ開発、家政・生活改善、野菜栽培）との意見交換 【ホームステイ】 ・各家庭で交流	ホームステイ先、 フラム市
5	8月6日 (日)	【ホームステイ】 ・各家庭で交流 【日系社会視察】 ・富士地区入植祭 【世界遺産】 ・トリニダ遺跡視察 【教材購入】 ・エンカルナシオン市内散策 【移動】 エンカルナシオン空港→アスンシオン シルビオ・ペティロッシ空港	アスンシオン
6	8月7日 (月)	【移動】 アスンシオン→イタウグア市 ・ニヤンドウティ生産者宅訪問 【移動】 イタウグア市→ンボカジャトゥ市 【青年海外協力隊活動視察】 ・小学校教育隊員@エロエス・デル・チャコ小学校 【移動】 ンボカジャトゥ市→アスンシオン	アスンシオン
7	8月8日 (火)	【現地学校視察】 ・NIHON GAKKO 【プロジェクト視察】 ・産業界のニーズに応える高度技能人材育成プロジェクト@職	アスンシオン

		業能力開発局日本パラグアイ職業能力促進センター 【青年海外協力隊活動視察】 ・音楽隊員@国立音楽院	
8	8月9日 (水)	【青年海外協力隊活動視察】 ・看護師隊員@ロマ・ピタ病院 【教材購入】 ・セントロ（旧中心街） 【表敬】 ・日本大使館表敬訪問 【JICAパラグアイ事務所訪問】 ・研修報告 ・懇親会	アスンシオン
9	8月10日 (木)	帰国 空港チェックイン→パラグアイ発（13:20発） パラグアイ→サンパウロ→アトランタ	機内泊
10	8月11日 (金)	アトランタ→成田	機内泊
11	8月12日 (土)	成田空港着（14:45着）	日本

参加者氏名

	氏名	県名	所属先	担当教科
1	岩田 典男	香川	三豊市立比地小学校	社会・3年
2	越智 由佳	愛媛	愛媛県立土居高等学校	英語・1, 2, 3年生
3	近藤 美鈴	愛媛	西条市立橘小学校	全教科・6年生
4	福家 慎一	香川	高松市立川島小学校	体育・6年生
5	横井 直美	愛媛	西条市立小松小学校	特別支援学級
6	福嶋 綾子	高知	四万十町立窪川小学校	音楽・3~6年生
7	次田 由梨	高知	高知県立中村高等学校	国語・1~3年生
8	沖 彩菜	徳島	徳島市城西中学校	理科・2年生
同行者				
9	今井 英里	愛媛	愛媛県国際協力推進員	
10	梯 泰三	徳島	吉野川市立鴨島第一中学校	数学

海外研修レポート

担当日：8月2日（水）

記録者：岩田 典男

- 1) 訪問先：各空港～羽田空港～成田空港～アトランタ空港～サンパウロ空港～アスシオン空港
- 2) 研修内容：準備物や交流授業の分担、現地に着いてからの行動を、待ち時間を利用し確認する。
- 3) 所感

「高知3人組、今、羽田空港に到着しました。」「香川組は、カレーを食べています。」メールでやりとりしながら各空港を出発して成田空港を目指す。忘れ物はないか、教材の準備はこれでいいか等の不安と、パラグアイの人たちとの出会いへの期待とで胸を大きく膨らませていた。

空港では、旅行会社の西垣さんが出むかえてくれ、空港での手続きを手伝っていただき、安心して出発できた。ここで問題になったのが、両替。日本円をパラグアイで現地のグアラニーに両替するのがいいのか、ドルに換えておき、ドルをグアラニーに両替するのがいいのか迷った。円よりもドルの方が通用するのではないかという判断で、空港で、円をドルに両替した。（アスシオン空港でも円をグアラニー変換できる）

アトランタ空港での入国審査。「どこへ行くのか」「なぜ行くのか」「危険物や食べ物は持っていないか」等、英語で質問され緊張しながら答えた。ボディチェックもかなり厳しい。くつも脱ぎ、ベルトを外した。預けた荷物も、中を開けられチェックされる。鍵は外しておくように、事前研修で指導を受けた。銃を持った警備員があちらこちらに立っていた。2001年のテロの影響を肌で感じた。

小さい子どもがいる家族や高齢者が優先的に搭乗し、まわりの人もそれが当然だと受け入れていた。民主主義が徹底されていると感じた。

成田からアトランタまで12時間、アトランタからサンパウロまでの11時間の飛行、待ち時間も入れて36時間の移動だ。ビデオを見て過ごした。日本語訳でも見られるので、退屈はしなかった。

【長時間のフライト】



【乗り換え時間を使っての打ち合わせ】



1) 訪問先：パラグアイ到着・JICA パラグアイ事務所にてブリーフィング・アスンシオン市ホテル

2) 研修内容：

- JICA パラグアイ事務所にてパラグアイの現況について学ぶ
- 明日以降の交流授業の打ち合わせなど



3) 所感：

長い長い空の旅を終え、パラグアイの首都アスンシオンに到着した。飛行機から見たパラグアイの広大な大地に、皆興奮した。空港には、パラグアイ事務所の方がお迎えに来てくださっていて、いよいよ研修が始まるのだという気合が入った。

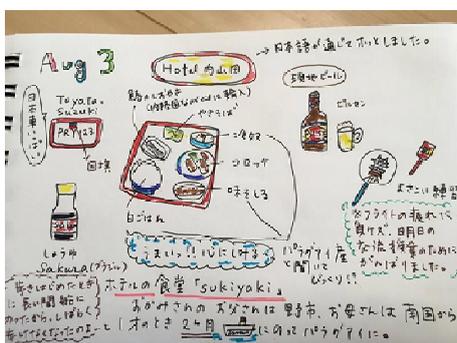
その後、バスで JICA パラグアイ事務所へ移動した。まず吉田所長から、この国の概況をお聞きした。パラグアイでは、近年、貧富の差が大きくなっていることが社会問題となっていること。また、日本から戦後に移住した人が現在は、7000 人から 10000 人程度いること。その中には四国から移住された人もたくさんおられるということだった。苦勞して成功された人も多く、パラグアイ国民からも、その勤勉さや誠実さで、尊敬されているとお聞きしうれしく思った。

続いて、村上幸枝氏から詳しい講義を受けた。南米に位置するパラグアイは日本の 1.1 倍の面積を誇り、人口は約 680 万人で、そのほとんどは混血である。お金の単位は、グアラニーで、下 2 けたを消して 2 倍したものが日本円になるそうだ。(1 万グアラニー=100×2=200 円) 大豆・小麦の農牧産業が盛んで、とくに、大豆は世界での輸出量第 4 位、生産量は 6 位だそうだ。また安価で豊富な水量を蓄えており、電力はブラジルに売電している。昨年 2016 年が、移住 80 周年であり、眞子内親王も式典に参列されたそうだ。私たちが訪問する予定の、ラパス移住地には日系社会があり、日本人会が存在している。そこでは、日本語教育も行われているということだった。JICA では、日系社会へ、『支援』から『協力』へということで、パートナーとしての日系社会と位置付けていることも知った。ほかにも、伝統的なダンスのことや、テレレというマテ茶の回し飲みをする文化、伝統工芸品であるニャンドウティについて教えていただいた。村上氏の着ていた『アオポイ』といわれる伝統的な衣服が気に入り、購入したいと口にする研修員もいた。

ホテルは『内山田ホテル』で、フロントでは日本語が通じ、ホッとした。長旅の疲れもなんのその、翌日から始まる交流授業の打ち合わせを行った。ホテルにおられた水野 SV が翌日の職業訓練校に勤務されているので、心強いアドバイスをいただけた。そして、『よさこい』を、みんなで練習した。夕食は、内山田ホテルでおいしい和食をいただいた。女将さんが、高知出身の方で興味深いお話をたくさん聞くことができた。また、偶然にも短期ボランティアのよさこい隊員の富士さんが同宿されていて、翌日、職業訓練校と一緒に踊ってくれることになった。日本から遠く離れたパラグアイの地で、こんなにおいしい味噌汁と白ご飯が食べられると思っていなか



ったので、うれしい夕食となった。明日からの研修が楽しみ♪♪である。



- 1) 訪問先：①ドン・カルロス・アントニオ・ロペス職業訓練高校
②ラ・パス農業協同組合
③ラ・パス日本人会

2) 研修内容：

●ドン・カルロス・アントニオ・ロペス職業訓練高校

代表生徒による歓迎を受けた後、校長先生のお話をお聞きした後、自動車整備（SV）活動視察や授業視察を行った。その後、高校生のクラスを4グループに分け、手遊びや習字、昔の遊び等の交流授業を行った。

●ラ・パス農業協同組合

野菜栽培隊員（SV）の方のプレゼンによる活動状況の話をお聞きした後、農業協同組合の視察を行った。

●ラ・パス日本人会

ラ・パス日本人会の会長さんのお話をお聞きした後、ラ・パス日本人会の方との懇親会に参加した。

3) 所感

カルロス・アントニオ・ロペス職業訓練校は、日本政府の無償資金協力によって建設された。職業訓練校と工業高校が併設されており、現在職業訓練校には9科、高校には4科設置されている。自動車整備隊員の水野（SV）さんが、高い技術指導や工具の整理整頓を徹底されているため、とても助かっていると現地の先生方が言われていた。卒業生はここで身に付けた専門技術を生かして様々な職場で活躍している。ここがパラグアイに来て最初の視察場所だったが、先生方や代表児童による歌の歓迎を受けたり、国旗色のリボンの付いた麦わら帽子をプレゼントしていただいたりしてうれしかった。交流授業の最初には、全校生徒が集まった中庭のようなところで「よさこい」を披露すると、子どもたちの飛び入り参加もあり、とても盛り上がった。

ラ・パス農業協同組合では、野菜栽培隊員（SV）の水野さんがプレゼンを用意してくださっていて、活動の様子を分かりやすく説明してくださった。その後、施設を見学させていただいたが、小麦を保管しているサイロや製粉工場の大きさに圧倒された。

ラ・パス日本人会への表敬訪問では、会長さんが概要を説明してくださった。ラ・パス地区は、戦後移住者が多いこと、移住当初は、何も無いところからの出発で苦労したが、今は農業で成功して移住し続けていて、大規模な農業経営をしている方が多いことをお聞きした。その後の懇親会では、四国4県の出身者別の座席になっていたため、話も弾んだ。どの方も私たちの訪問をととても喜んでくださり、移住当初の苦労話を涙ながらに話していただいたり、今のパラグアイでの生活を誇らしく語っていただいたりした。最後に、本日2回目の「よさこい」を披露すると、また飛び入りで一緒に踊ってくださる方がいて盛り上がった。カラオケも一緒に歌ったり、私たちが歌のプレゼントをしたりして楽しい時間を過ごすことができた。



職業訓練校で「よさこい」を披露。飛び入り参加の子どもたちもいて、盛り上がりました。

野菜栽培隊員（SV）の一柳さんが、ラ・パス農業協同組合での活動の様子を詳しく話してくださいました。



ラ・パス日本人会のみなさんと、最後に集合写真を撮りました。

担当日：平成 29 年 8 月 5 日（土） 記録者：福家慎一

1) 訪問先：①ラパス日本語学校

②ラパス市総合コミュニティ開発事業との意見交換

③ホームステイ

2) 研修内容：

●ラパス日本語学校

生徒たちの移住学習の見学をし、交流授業を行った。交流授業では、日本の小学校の授業風景や給食などを映像で紹介した。また、長縄跳びを一緒にしたり、よさこい踊りを披露したりした。

●ラパス市総合コミュニティ開発事業との意見交換

協力隊員（保健師、コミュニティ開発、家政・生活改善）の方々から活動の内容や現状についての報告を聞いた。その後、意見交換やインタビューを行った。

●ホームステイ

パラグアイ人宅へホームステイを行い、現地の生活様式や食事を体験した。

3) 所感：

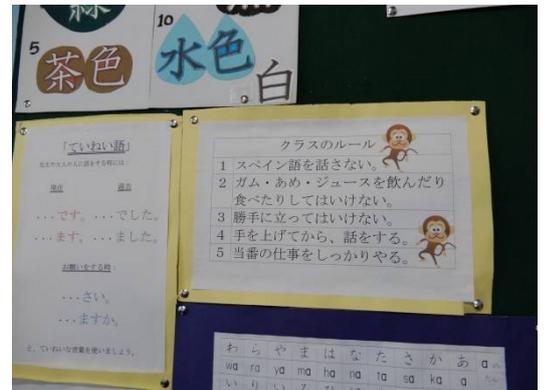
ラパス日本語学校では、日本の教育と同じように礼儀や躰が大切にされていた。教室には言葉遣いやルールなどが掲示されていた。また、生徒たちは移住学習を行っていた。移住者へのインタビューを行う中で、「どんな思いで移住したのか」、「移住後の苦労」などを知ることができた。当時の様子を体験していない生徒や私には、移住者の方から聞いた話が新鮮で心に沁みる話であった。交流授業では、生徒たちは日本の学校風景の映像を興味津々で見ている。長縄を一緒に遊び、体を動かすことで交流がより深まったと感じた。

ラパス市総合コミュニティ開発事業との意見交換では、保健師、コミュニティ開発、家政・生活改善の協力隊員の方から話を伺った。農家間での収入格差があったり、ラパス市における都市部と農村部の教育格差があったりなど課題は多い。また、若年妊娠や肥満・栄養問題などの健康課題もある。パラグアイの人々に洋裁の基本を学んでもらうことや調理講習を行うことで、就職のチャンスや健康的な食事につながることを期待されている。

ホームステイでは、非常に有意義な時間を過ごすことができた。ホストであるバレットさん一家が親切に迎え入れてくれたことが有り難かった。生活様式の違いを体験することができ、伝統的な料理であるアサードやレビーロをご馳走になった。また、バレットさんから家族の話や子どもへの思いを詳しく聞くことができた。パラグアイの人は家族を大切にするという話は聞いていたが、奥さんと子どもと話をしている光景を見ていると、日本とは違う家族の温かさがそこにはあった。そして別れの朝。軽快な音楽に合わせて、朝から一緒に踊った時間はとても新鮮で、何よりも言葉や文化の枠を越えてより絆が深まった素晴らしい時間でもあった。



<移住者へのインタビュー（ラパス日本語学校）>



<教室内掲示（ラパス日本語学校）>



<朝の風景・朝食作り（ホームステイ）>

- 1) 訪問先：①ラ・パス市富士地区慰霊祭・敬老会・入植祭
②トリニダの遺跡（世界遺産）

2) 研修内容：

●ラ・パス市富士地区入植祭

慰霊祭に参加。富士地区公民館にて敬老会、入植祭に招待いただき、歓迎を受ける。

●トリニダの遺跡（世界遺産）

パラグアイで唯一の世界遺産を訪れる。

3) 所感：

各ホームステイ先で名残惜しいお別れをして、富士地区へ向かう。1936 年以来、多くの日本人がパラグアイに移住し、定住地を切り開いた。今も多くの日系移住地が点在している。富士地区は、ラ・パス市の中にある三つの移住地の一つ（富士地区・ラパス地区・サンタ・ローサ地区）。まず、富士地区に入り、大きな慰霊碑の前で手を合わせ祈る。62 年前に入植し、亡くなった方々112 名の今までのご苦労は想像を絶するものであったであろう。

広大な麦畑の中に堂々と建つ慰霊碑とお墓が印象的であった。この方々は、一度でも日本に帰ることができたのであろうか？故郷日本のことを思いながら亡くなったのであろうか？風に揺れる麦畑に佇みながら思いに



<富士地区>

ふける。その後、富士地区公民館に移動し、敬老会と入植祭に招かれる。全て婦人会の手作り料理がテーブルに並んでおり驚かされた。海苔巻き、おでん、おはぎなど、どれも日本食！ステージでは、日本舞踊に日本語スピーチ。日本文化の伝統がしっかりと守られており、継承されている。移民一世の方は 80 歳代。

二世の方は 60 歳代。三世四世の時代になりつつ今、この日本文化をどう守り、どう継承していくかが課題のようだ。私たち訪問団もステージ発表の最後に高知のよさこい踊りを披露させていただいた。高知や愛媛出身の方もおられ、私たちのよさこい踊りを見て、喜んで下さった。お別れの際には、皆さん公民館玄関まで出てください、手を振って見送っていただいた。富士地区訪問は、日本の反対側に、日本より日本らしい日本を見た瞬間であった。

トリニダの遺跡では、ガイドさんの説明を聞きながら遺跡を見て回った。トリニダの遺跡は 17 世紀にパラグアイ先住民たちに宣教するため各地を訪れたイエズス会により造られた「ミッション村」の一つである。1706 年より建築され、1993 年にユネスコ世界文化遺産として登録された。教会は全て石でできており、アーチで積まれた石は、その時代の建築技術の素晴らしさを感じた。



<慰霊碑で祈る（富士地区）>



<入植祭（富士地区）>



<トリニダ遺跡>

- 1) 訪問先：①ニヤンドゥティ生産者
②エロエス・デル・チャコ小学校

2) 研修内容：

●ニヤンドゥティ生産者宅訪問

制作を見学、作品を購入。

●エロエス・デル・チャコ小学校

給食を試食、集会で紹介され、6年生と1年生の授業を参観。低学年、高学年で日本文化紹介の体験学習を行った後、教職員と意見交換を行った。

3) 所感

ニヤンドゥティは、パラグアイのレース編みである。「蜘蛛の糸」という意味で、枠に張った布に下絵を描き、刺繍しながら糸を絡めていく。刺繍ができた後、ノリをかけ、刺繍した部分を切り抜き、布を取り除く。テーブルクロスのような大きさから2センチ四方の小さいものなど用途によってサイズもさまざまである。色遣いがとても鮮やかで、日本にはあまりないような組み合わせもあり色彩感覚の違いを強く感じた。私たちが訪ねたイタウグアの女性は、ニヤンドゥティを作ること子どもを女手一つで育てたそうだ。日本でも取り上げられた彼女の作品は、より細い糸で作られていてとても繊細だった。ニヤンドゥティの知名度が上がることによって、多くの人々がパラグアイを知るきっかけになってほしい。

地元のローカル校であるエロエス・デル・チャコ小学校は、JICA ボランティアの小学校教育隊員の稲葉哲史さんが派遣されている。児童数は6学年166名で、午前の部、午後の部の二部制で、それぞれ83名が通っている。給食は無料で、食べてから帰る児童と食べてから授業を受ける児童がいる。チキンライスに似たこの日の給食はとても美味しかった。午後の部は国歌を歌い、国旗掲揚する集会で始まった。授業は6年生の算数を参観した。内容は面積の求め方で、マジックボックスを用いた導入で子どもの興味をひき、実際に教室の面積を求めるために教室の縦横を測る活動を取り入れるなど、教材研究がよくなされた授業で、日本の研究授業を見ているようであった。その後、体験授業を低学年と高学年で行った。低学年ではグループに分かれ、手合わせ歌「十五夜さんのもちつき」などを、高学年では全員で人数や条件をつけてグループを作るゲームをした。グループに入れなかった子どもに対する岩田先生の温かいコメントも心に残った。最後に、教職員の方々と意見交換を行った。先生方が研修会に参加して研鑽を重ねていること、JICA ボランティアが長年地域の学校に入り、算数教育のレベル向上に寄与していることがよくわかった。日本の学校の様子などもビデオで紹介すると、それまで黙っていた先生が堰を切ったように質問し始め、同じ教師としてより中身の濃い意見交流ができた。

地元の小学校を訪問できたことはとても有意義だった。特に、短い時間であったが教職員の方との交流は貴重な体験だった。環境は違っても「教育」に情熱をもって臨んでいることを知り、改めて自分も日本で頑張ろうと思った。また、教育現場に若い JICA ボランティアが多く派遣されていることを知り、一度きりの訪問で終わるのではなく日本に帰ってからも何か協力できることはないかと強く感じた。



〈 繊細で美しい色遣いのニヤンドゥティ 〉 〈 ニヤンドゥティの制作 〉 〈 チャコ小学校での6年生算数の授業 〉

担当日：平成 29 年 8 月 8 日（火）

記録者：次田 由梨

1) 訪問先：①NIHON GAKKO

②パラグアイ日本職業能力促進センター（労働省職業訓練局）

③国立音楽院

2) 研修内容：

●NIHON GAKKO

朝礼の中で歓迎式典を開いていただき、よさこいの披露をする。施設見学、授業視察（教科：日本語、対象：6 年生 27 名）、交流授業（内容：日本文化の体験、対象：6 年生 27 名、形態：児童 7 名前後に日本の教員 2 人がつき、全 4 班に別れる。）をする。校長との意見交換後、教員、ボランティア隊員等と昼食を取りながら親睦を図る。

●パラグアイ日本職業能力促進センター（労働省職業訓練局）

菊池四郎氏に「産業界のニーズに応える高度技能人材プロジェクト（SNPP）」の説明をしていただき、施設見学をする。

●国立音楽院

院長の案内のもと施設見学をする。ボランティア隊員の実際の活動の様子を再現していただいた後、インタビュー、意見交換をする。

3) 所感：

NIHON GAKKO の訪問は、大学生以外の約 800 名の生徒、教員による熱烈な歓迎ムードの式典から始まった。日本の裏側で、現地の子どもたちによる「君が代」の大合唱を聞くとは夢にも思わず、感激した。

日本の教育に感銘を受けた校長が創立したとのことだが、規模の大きさや、生徒の規律正しさ、今年新たに「ジャパン・アカデミー（起業育成支援コース）」を設けたことなど、パラグアイで日本の教育や価値観が受け入れられ、根付いていっているということが体感できた。しかし、当初の学校はたった 2 部屋の教室とコンピュータ室で、雨の日でも、デモの日でもどんな日でも毎日授業をするという学校の方針や、児童・生徒自身が掃除をすること、時間厳守という面で、保護者からクレームがあったということを校長先生から教えていただいた。学校の教育方針を曲げずに貫き通すという難しさを乗り越え、今年で創立 14 年目を迎える中、「改善」という言葉を標語として掲げ、毎年何か新しいものを、他校とは違うものを、と前進しようとする姿勢が、パラグアイでの NIHON GAKKO の評価につながっていると感じた。

見学した授業では、教材や時間配分など、児童を飽きさせないような工夫が見て取れた。パラグアイ人の担当教員が開発したという、トトロを表紙にしたひらがな練習帳に児童は愛着を持っていた。児童・生徒に授業の規律を守らせることや、簡潔な指示をすること、全員で一斉に声を出して学ぶ場面と個人で静かに演習する場面の使い分けなど、日本の学校でも意識されていることがここでも実践されており、改めて日本式の教育が地球の裏側

で通用していることにうれしさを感じた。

また、交流授業での関わりから、子どもたちには日本のことなら何でも知りたいという、日本への憧れや強い興味・関心が伝わってきた。初めて触れ合う外国人の大人に対して、臆することなく、積極的に話してみたり、遊びを試してみたりする姿に、子どもたちの無邪気さや好奇心は世界共通だと感じるとともに、これからも積極的に日本語や日本文化に触れて、日パの交流の架け橋になってほしいと感じた。

パラグアイ日本職業能力促進センター（労働省職業訓練局）では、私たちの研修の通訳である菊池エリカさんの叔父の菊池さんが「産業界のニーズに応える高度技能人材プロジェクト（SNPP）」を担当しており、プロジェクトの概要説明と施設の案内をしてくださった。パラグアイは農業国であり、産業分野での人材育成が急務となっている。その中で、隣国ブラジルの人材育成機関など地域のリソースを活用したり、企業が求める人材育成にポイントを置く CBT（Competency Basic Training）という方策をとってプロジェクトを進めているという。施設や、機材、道具などは清潔で、整理整頓が行き届いており、落ち着いて一定レベル以上の訓練を受けられる環境が整っていると感じた。また、あらゆる機材に JICA のシールが貼ってあり、日本からの支援が大きいということも分かった。職員の雇用形態や、技術を身につけても給料のいい外国企業に流れるという課題があるとも聞いたが、これには日本の地方が抱えている問題との共通性を感じた。

国立音楽院では、院長と對馬隊員（チェロの指導者）に迎えられ施設の見学をした。卒業生の 80% がプロになるという国家的な専門家育成機関という役目だけでなく、趣味で音楽をしたいという人も受け入れており、増改築したという迷路のような建物に、保護者に付き添われた幼い子どもから大人までたくさんの生徒を見かけた。對馬隊員によると、ヨーロッパの音楽教育のシステムに則っており、幼少期からほぼ無料で本格的に音楽を学ぶことができる環境は、日本からすると羨ましくも感じるが、パラグアイ全体では音楽が専攻できる大学は 2 つしかなく、音楽科のある高校もないとのこと。日本とパラグアイでは音楽への理解や学ぶことのできる環境に違いはあるが、對馬隊員のように音楽の専門家として当地で活躍されている姿を目にすると、確かに音楽は国境を越える！と思われた。



NIHON GAKKO
「ひらがな練習帳」



パラグアイ日本職業能力促進センター
「菊池氏語る」



国立音楽院
「レッスン風景」

担当日：平成 29 年 8 月 9 日（水）

記録者： 沖 彩菜

- 1) 訪問先：①Loma Pyta 病院
②カテウラ地域・音楽団
③日本大使館
④JICA パラグアイ事務

2) 研修内容：

●Loma Pyta 病院

病院の概要と施設見学。看護師隊員の活動視察と意見交換。

●カテウラ地域・音楽団

カテウラ地域の町並みの見学。オーケストラの鑑賞と団長との意見交換。

●日本大使館

表敬訪問。

●JICA パラグアイ事務所

活動報告会。

3) 所感：

病院は、質の高い医療の提供を目指し、職員全員がその意識を強く持って従事していた。この病院は、患者の治療だけでなく、生活習慣病などの予防にも力を入れており定期検診などを行っている。また、病院独自のアプリを開発し誰でも簡単に、病気の情報などが得られるようになっていた。菊池 JV は、在宅介護の支援や健康管理指導、衛生指導などの予防医療の啓発に関する支援を行っている。派遣前は、日本の医療技術や知識を教えるという使命感を持っていたが、計画通りにいかないことが多く、自分が必要なのではないかと何度も思い悩んだことがあった。しかし、



〈 Loma Pyta 病院入口 〉

現地の生活に馴染んでいくと、物の見方が変わり知識や技術を教えるのではなく、逆に教えてもらっていることが多くなったと語ってくれた。病院の職員からは「相手の立場になって何ができるか。」を考えて行動するということを JICA の方から教えてもらい、それを大事にして医療に当たっていることを教えてくれた。互いがいの良いところを尊重しつつ、同じ目標に向かって取り組む姿勢が見られ、このはたらきがパラグアイの医療の発展に繋がっていくと感じた。

カテウラ地域には、ごみで作った楽器でオーケストラをしている団体がある。この地域は、ごみ処理場があり、そこに住む人々の多くがそのゴミを拾って生活をしている。この地域にオーケストラができたのは、カテウラの子どもたちが幼いころからごみ処理場の仕事に駆り出され学校に行くこともままならないという状況を知った、オーケストラの団長であるファヴィオさんが音楽をはじめたことがきっかけである。音楽活動を通して様々なことに挑戦することや、困難に立ち向かうプロセスを大事にしながら、この地域を変えていきたいと意気込むファヴィオさんの熱意に感心した。また、ゴミから作られた楽器を演奏する子どもたちの姿がとても生き生きしており、感動した。音楽を通して世界中のたくさん

の人々に元気と勇気を与えて行ってほしいと感じた。



〈 道端におかれているゴミ 〉



〈 ゴミからできたバイオリン 〉

日本大使館訪問では、これまで活動してきた感想などと共に、それぞれの自己紹介をした。その後、日系人の子どもたちがこれから日本語を学んでいくにあたり、どのように教育を進めていったほうが良いかについて意見交換を行った。そこでは、外国語を学ぶ楽しさを感じることができる機会を設けることや、日本語だけでなく日本の歴史も教えたらどうかというような意見があがった。これらを実行するためには、人材不足などの課題もたくさんある。しかし、これから日系社会を担っていく子どもたちへの期待は大きい。子どもたちがパラグアイの地で日本の文化を伝承していくことができるよう、日本からできることも考えていかなければならないと感じた。

JICA パラグアイ事務所ではこれまでの活動報告を、パラグアイの教育・日系社会・ホームステイ・協力隊の4つのテーマで行った。様々な場所を訪問し、たくさんの方々との意見を交わすことで、たくさんの刺激をもらうことができた。それをしっかりと四国の子どもたちに伝えていきたいという思いでいっぱいになった。

〈 活動報告の様子 〉



担当日：平成 29 年 8 月 10 日（木）

記録者：横井 直美

- 1) 訪問先：①スーパーマーケット
②シルビオ・ペティロッシ空港

2) 研修内容：

●スーパーマーケット

ホテル 10 時チェックアウトまでの時間、ホテルの近くのスーパーマーケットで最後の社会見学。

●シルビオ・ペティロッシ空港

通訳エリカさんとの別れ。寺林さんとの出会い。帰路へ。

3) 所感：

ホテル近くのスーパーマーケットへ歩いて行く。食品、雑貨なんでも揃っている大型スーパー。野菜も新鮮でたくさんあり、肉も固まりで量り売り。パンも大量に切り売りされていた。私たちは、お土産のチーパや教材になりそうな雑貨を購入した。アスンシオンの人たちは大きなカートで大量に食材を買っており、よく食べる民族であると再認識。週末は家族で集まり、きっと一緒に食卓を囲むのであろう。

いよいよ、パラグアイを離れる日がやってきた。あつという間の 8 日間。毎日、驚きと感動の連続で、8 日間の間にパラグアイに愛着が湧いたのは私だけではないはずである。

通訳として同行していただいた菊池エリカさんには、本当にお世話になった。通訳だけではなく現地ガイドとして私たちに大変分かりやすくパラグアイの素晴らしさを伝えていただいた。エリカさんのおかげで、この研修が 2 倍にも 3 倍にも充実したものになった。空港のゲートまで見送っていただき、再会を約束して記念撮影をした。きっとまた会えるような気がする。



<エリカさんとの別れ>

別れがあれば出会いありで、空港で出会った日系人の寺林義雄さん。ブラジルまで一緒に移動する。寺林さんは北海道網走市の方で、4 歳の時、親戚一同でパラグアイに移住。家族みんなでフラム地区に住んでいたそうだ。父親がでんぷん工場を営み、寺林さん本人は 13 歳から働いていたらしい。車に 16 ミリフィルムを積んで、村々で映画会をして稼いでいたそうだ。商売をしたりサッカー選手として活躍したりと波乱万丈の人生を飛行機の中で語ってくださった。24 歳で日本に渡り、結婚。それから 66 歳の今まで日本佐賀県で過ごす。今回は、95 歳になる母親に会いにパラグアイへ来たそうだ。ブラジルからドバイを経由して日本を歩き来していると聞き、まさに日本とパラグアイの架け橋。明るく話す寺林さんの目はその時代を生きたくましさで輝いていた。寺林さんと別れ、飛行機はアメリカアトランタへ向かう。



<寺林さん>

- 1) 訪問先：①サンパウロ空港
②サンパウロ空港からアトランタ空港へ
③アトランタ空港

2) 研修内容：

●サンパウロ空港

サンパウロ空港では、ブラジルの方とポルトガル語で交流！？

●サンパウロ空港からアトランタ空港へ

パラグアイ研修の振り返り

●アトランタ空港

成田空港への出発を待つ、最後の乗り継ぎ場所。パソコンで研修のまとめをしたり、アトランタ空港を散策したりした。

2) 所感

サンパウロ空港では、空港にあるバーで軽く食事をした。メニューを見ると、もちろんポルトガル語・・・。店員さんもポルトガル語・・・。ポルトガル語は、全く分からなかったが、何とか店員さんとコミュニケーションをとろうと話しかけると、片言の日本語を話してくださった。その後も、言葉は通じないことが多かったが、身振り手振りで伝え、楽しい時間を過ごすことができた。

サンパウロ空港からアトランタ空港へは、長時間のフライト。3席並びの座席で真ん中が空席。空席の向こうはグループの仲間。ゆったりと座ることができ、少しリラックス。前後もグループの仲間だったため、研修の振り返りを話しながら、パソコンでまとめたり、スマホで写真を編集したりと、それぞれが、充実したパラグアイ研修のまとめを行っていた。

アトランタ空港へ到着。成田空港への出発を待つ、最後の乗り継ぎ場所。パソコンで研修のまとめをする人もいたが、アトランタ空港を散策する人が多かった。ようやく英語圏。英語が通じることに安心感。振り返ると、日本を出発して最初に到着したのがこのアトランタ空港。まだ、どことなくぎこちなかった仲間たち。これから始まるパラグアイ研修への期待と不安が入り交じっていた一週間前。今は、共に過ごしたパラグアイでの研修の日々が愛おしく、別れの時間の訪れを寂しく感じていた。それだけ充実した日々を過ごすことができたのも、このメンバーだったからだと思う。そんなことを思いながら、アトランタ空港での時間を過ごした。



サンパウロ空港にて



アトランタ空港出発

担当日：平成 29 年 8 月 12 日（土）

記録者：次田 由梨

1) 訪問先：アトランタ空港→成田空港→羽田空港→各県の空港

2) 研修内容：

●帰国

3) 所感：

帰国の道のりは今日も続く。日本時間 12 日の明け方にあたる頃、アトランタ空港を出発する。最後で最長のフライトだ。アトランタでは、みなのもっとも過ごしていた。これからあの 13 時間のフライトが待っていると思うと、ここで手足を伸ばして休んでおきたいという思いが強かった。そして、ここはこの研修最後の海外の地である。思いが詰まった南米も、もう遠い海の向こうだ。帰国が、旅の終わりが、近づいている。

空港の広々としたフロアの一角にソファを寄せ集め、そこをチーム・パラグアイの拠点にした。おっきーも柔らかいソファの上で身体を伸ばして横になることができ、一安心。それぞれが、免税店を見て回り、お土産の補充をしたり、英語の教材を見つけてきたり、軽食をとったり、と身体を動かしてリフレッシュもできた。その間にも、えりちゃんは写真の整理を頑張っており、おかげでアトランタを発つときにはみなでデータの共有のイメージを持つことができた。

空港で羽を伸ばせたことや、座席の関係、これが最後のチーム・パラグアイとしての活動だと思うと、長旅の不安は案外小さいものだった。機内食も和食になり、一気に日本が近づいてきた。到着の際、よこちゃんが機内でずっと写真の整理をして、一連の研修の記録を作っていたことを知る。最後の最後まで、このチームのメンバーから学ぶことは大きい。

成田からリムジンバスで羽田に向かう。お盆休みの混雑の中、各県の空港への搭乗手続きが済み、最後のミーティングをする。事務的な連絡とともに、お疲れ様のねぎらいの言葉や感謝の言葉、これからもお互い頑張ろうというエールを掛け合った。

グーグー、チーム・パラグアイ！！これからもよろしくお願ひします。



パラグアイにて
「心に刻まれた風景」



羽田空港にて
「チーム・パラグアイ！」



同行者より

～パラグアイで出逢ったもう一つの日本～

夏真っ盛りの8月上旬、四国4県から8名の教員が南米パラグアイへ飛び立った。今年度は参加教員8名の他に同行者2名、計10名での研修となった。海外に行くことはあってもパラグアイが目的地になることは殆どないのではないだろうか。パラグアイは日本の反対側に位置し、世界中へ派遣されているJICAボランティアにとっても、一番遠い国だそう。 「参加者の多くはきっと、不安と緊張を抱えながらパラグアイの地を踏みしめるに違いない。同行者として、参加者の心のケアもしていこう」私は、そう思っていた。ところが、今年の参加者は、成田空港に集ったその瞬間から溢れんばかりのエネルギーを放出し、乗り継ぎのため降り立ったアメリカ、ブラジルの空港内でも、お互いへのコミュニケーションが止らないのである。「時差ボケにならないか、心配」と不安な心情を吐露していた教員でさえ、パラグアイに着いて宿泊した内山田ホテルで、翌日の学校交流で披露するために、人一倍楽しそうにヨサコイを練習していた。時差ボケにも敵う、エネルギー量だったようだ。

今回の研修では、現地の学校の子どもたちとの交流も行われた。パラグアイの公用語は、スペイン語とグアラニー語であり、日本語も英語も通じない中での交流であった。しかし、そこはさすが、時差ボケを感じさせない、エネルギー量を持った参加教員である。持ち前の明るさと豊かな表情、声のボリュームで言語の壁を越えて、子どもたちのハートをワシヅカミしていた。交流中、子どもたちがキラキラした笑顔や表情を見せたのは、参加教員自身の魅力と子どもへの想いの賜物と感じた。また、今回の研修を語る上で外してはならないのは、日系社会との出逢いである。今回、幸運にも、ラパス富士地区の慰霊祭と入植祭に参加することができた。日系の方々との交流を通して、日本の反対側に、日本よりも日本らしい、古き良き時代の日本があることを知った。その学びは非常に感慨深く、現地の日系の方々とお別れでは、感極まって涙を流される教員もいたほどだ。

教師海外研修の目的は、現場で活躍する教員が海外で様々な経験をし、そこで感じたこと、考えたことを帰国後の教室で子どもへ還元してもらうことである。今年度の研修では、日本がJICAを通じてどのような国際協力を実施しているのか、パラグアイで活躍する日本人専門家や青年海外協力隊員との意見交換を通じて学ぶことができた。また、現地の人々との交流を通して、「パラグアイ」という国を大いに感じる事ができた。参加教員からは、「遠い国の一つでしかなかったパラグアイがとても身近な国になった」という声も聞こえた。実際に、自分の足を運んで、自分の目でみて、感じて考えたこと、それは生の声となって、子どもたちへ届く。そしてそれは、きっと子どもたちの心に響くだろう。

今後、参加者が四国とパラグアイを繋ぐ「カケハシ」となり、将来、四国から多くの若者が世界で活躍することを期待したい。

JICA 愛媛デスク 今井 英里